南太平洋における宣教史の地理学的研究

——トレス海峡に「光の来た日」——

大　島　襄　二

はじめに

太平洋地域を研究する場合，その序論としての「史的展開」ではヨーロッパ人の記録に依存する場合がきわめて多い。利用する資料は航海者の記録であったり，貿易商人の記録であったりするが，とくに18世紀末から20世紀初頭にかけてのキリスト教布教師による宣教の記録は見落すことのできない資料である。

15世紀に遡ることのできる航海者の記録は，「大航海・大発見時代」という新しい時代の到来を物語り，これがやがてヨーロッパに「コスモグラフィア」の時代を招来し，地理的知識を一挙に拡大させたものとして意義の大きいものである。しかし，そこには航海者自身の予備的知識の不足に基づく多くの誤記・誤謬や，読者を意識しての誇張から，ときとしては虚構さえも包含されていることがあって，史料として学問的に取り上げるに耐えない場合があるのも致し方はない。

それに比べて，キリスト教の宣教史となると，時代も新しくなってきて，一応の予備的知識が整っていることと，新しい宗教をもちこもうとする動きであるために，必然的にかなりの正確度と精密度をもつものとなる。ことに，それが対象地域の人々の内面的な生活にまで迫らなければならない事業であるだけに，その精神構造から，社会・法制といった組織にまで深入りした記述が多くなってくる。その点で，現地にとっては外来の，この新しい宗教が接触を開始した時点での断面史として，宣教史のもつ意味は重大であるといえよう。

もちろん，そこにも誤謬・誤解もあれば，誇張・虚構も皆無とはいえない。あるいは宗教的独断から現地の諸風習をあえて否定し去ろうとするために，価値観の異なった罪悪視・劣等視が随処に散見されるのも致し方ないところであろう。しかし，少なくとも一定期間現地社会に入りこんで，何らかの影響を及ぼそうとした働きの記録であるから，内容的に深みをもつ場合も多い。人類学・民族学の研究の資料として使用し得る記録も，かなり多く見出すことができる。

ところで，筆者は1974年から1979年にかけて5回にわたってトレス海峡諸島（オーストラリアのクインズランド州側，およびパプア・ニューギニアの西部州側）の調査を重ねてきたが，最初にこの地域に足を踏み入れたときから，ここが100％キリスト教化された地域であるということに関心をもった。有人のすべての島嶼には教会（大部分が英国国教会 Church of England 派）があり，日曜日が聖なる休日であり，島の人々が着飾って礼拝に出席すること，島民は生れたときに洗礼を受けて名前がつけられるということ，島民に過去の話を尋ねると「光の来た日（Light coming day)」としての1871年7月1日を境に，それ以前を「闇(darkness)」の時代とよんでいること等，この地域でのキリスト教化の実が上っていることを知るとともに，ここに「光」をもたらしたロンドン宣教協会（L. M. S. = London Missionary Society）の歴史をしばしば聞かされた。

トレス海峡諸島の地理学的・民族学的調査報告書

は詳しく他の一巻を編んで述べるが，その一環としてキリスト教の宣教では，どの島に地理的・戦略的重要性をおいたか，確かめたいと思った所以である。

当座の用に立った資料はジョン・ベイトン(John Bayton)の著である。著者ベイトン自身をロッカンプトン(Rockhampton)に訪ねて，その内容についての疑問点を直接尋ねることもできた。しかし，後にエジンバラ(Edinburgh)大学の神学部書庫でサミュエル・マックファーレン(Samuel McFarlane)の著を閲覧しそのコピーを手に入れて，これと照合することができたのは幸いである。これらと現地調査で得たものを比較研究することに多大の興味を覚えたので，これをこの一文に草する次第である。

なお，L.M.S.がトレス海峡に入る前に，太平洋伝道の拠点としたところはロヤルティ(Loyalty)諸島のリフ(Lifu)島であった。1871年の最初の船の出発点もリフ島であったし，現在のトレス海峡の住民の中に，父祖がリフ島その他から来たという家系もあることから，そのロヤルティ諸島にも1976年と81年の2回の現地調査を行った。これらの結果の一部も例証として挙げることにする。

この論説のために使用した資料は，前述の通り主として次の2人の著書であるが，いうまでもなく①②は自分自身の経験の「記録」であり，③④は後代の人がそれらを基にして綴った「歴史」である。

① Samuel McFarlane (1873) : Journal of a Missionary Voyage to New Guinea

② Samuel McFarlane (1888) : Among the Cannibals of New Guinea

③ John Bayton (1965) : Cross over Carpentaria : Being a History of the Church of England in Northern Australia from 1865-1965

④ John Bayton (1971) : The coming of the Light

なお，ここで注意しておきたいことは，①②の著者マックファーレンは上述のL.M.S.の宣教師であるが，これはプロテスタントの中のCongregational Church，すなわち日本では組合教会派と訳されるものであり，③④の著者ベイトンは英国国教会の現職の大司教である。同じイギリスのプロテスタントの教派であっても，現地への入り方に違いがあり，現地社会からもその受入れ方に微妙な違いがあることを忘れてはいけない。とくに，前者がその著の表題にも，ニューギニア伝道の一環としてのトレス海峡を意識しているのに対して，後者では歴史家として好著を編んでいるベイトンがL.M.S.の伝道業績を評価してはいるが，トレス海峡では経済的に行詰ったL.M.S.が1914年ここを撤退して，その後を英国国教会が継承したという交代劇以降に主眼点を置いており，オーストラリア内陸のアボリジニーズ伝道から始まって，カーペンタリア湾の向こうまで伝道圏を広げたという把握をしていることは興味深いことである。

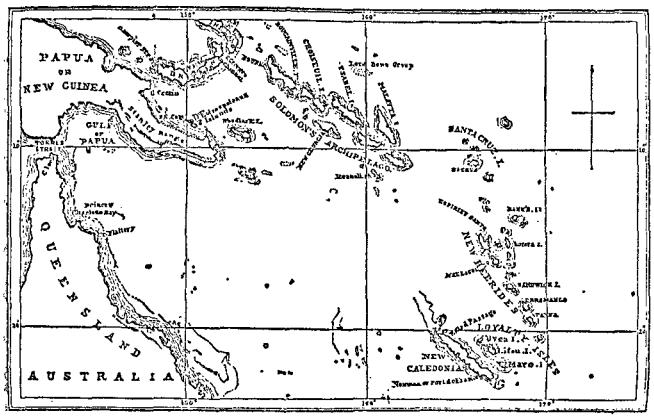

図1　マックファーレンの伝道航海日誌中の地図（ロヤルティ諸島からニューギニアまでが納まっている）

I　上陸地としてのダーンリィ島の選択

「1970年，ロンドン宣教協会の牧師サミュエル・マックファーレンはニューギニア原住民へ福音を宣べ伝

えるための調査をすべくトレス海峡に来た。彼は当時の政府機関の所在地サマーセット（Somerset）—ヨーク岬北端，今は無人化している—でナマコ漁業者・真珠貝漁業者・貿易商人等から各島の状況を聞き，海峡諸島民への宣教に協力を得られるかどうかを確かめた。この短い滞在の結論として，彼はトレス海峡に宣教団を伴って来ることを決め，その仕事を始めるのに最も好都合な場所はダーンリィ（Darnley）島であると判断した」（資料③ p. 43）

当のマックファーレンの方は資料②の中でダーンリィ島に関する情報をかなり詳しく述べている。とくに，結果的にその島の中でも上陸地点として選んだトレチェラス（Treacherous）湾の由来については多大の関心をもっており，その史実の叙述にかなりのページを割いている。ここにそれを再録することは避けるが，それは1793年7月3日に起こった「チェスターフィールド（Chesterfield）号事件」とよばれるもので，イギリス軍艦の乗員とダーンリィ島民との激しい戦いで島民に潰滅的被害を与えたものであり，その原因が島民の「裏切り」によるものであるとして名づけられたのがその湾の地名である。マックファーレンの後の記述では80年を経たこの事件を，島民は昨日のことのように覚えていたというが，マックファーレンは訪れる前から他の情報によって，むしろ「裏切り」は島民の側ではなく水兵の側に，それは不幸なことに意思の疎通を欠いたために不注意で起こしたことであったとはしても，友好的な島民の受入れの気持を一挙に激昂させた行為があったからだという判断をもっていたと思われる。そして行政官ジョン・ジャルダン（John Jardine）が，1866年にサマーセットから書き送った報告書に，「（トレス海峡の）島民は北の方に行くほど温厚で，ことにダーンリィ島々民は，そこでナマコ漁業を通年操業しているシドニーのエドワーズ（Edwards）船長という人によれば，友好的で知的にも優れており，彼はそこで快適な小屋を建て，ヤム，バナナ，ココナッを栽培して充分自給しているという。もし島民たちの間に伝道をしようとするならば，宣教師たちはここでならさしたる困難もなく満足すべき成果を挙げ得るものと思われる」（資料③ p. 43）と述べていることから，マックファーレンは過去の悲しい惨劇にもかかわらず，確信をもってこの島を選ぶことにしたものであろう。

さらに，彼はこの島を，ニューギニア本土の住民との往来が頻繁であること，土地が豊穣で気候が温和であると判断したこと（恐らく前記ジャルダンの報告に基づいて），そしてここでなら島民の協力が得られるとの期待から選択したものらしい。「（事前に）学び得たすべての条件から，ダーンリィ島こそわれわれの宣教の事業を開始するのに正に最適の場所であることがわかった。そこはトレス海峡の中心的位置にあり，ニューギニアの原住民もしょっちゅうやって来るところだからである。トレス海峡のことをよく知っている何人かの船長も，この島を推薦してくれた」（資料① p.345）

トレス海峡ではL. M. S. の一行を近代史の開幕の物語の中で，海峡に「光」をもたらした使者として語り伝えているが，L. M. S. の側ではこれはニューギニア伝道への出発であり，したがってダーンリィ島もニューギニア伝道の拠点として選んだのであった。

ロヤルティ諸島のリフ島で長年準備を整えたマックファーレンは，出発直前にサモアから老師W. マレー（A. W. Murray）という南太平洋伝道のベテランを迎えた。彼は長年の宣教事業の最後の仕事として，このニューギニア伝道を志したものである。いわゆるニューギニア伝道の一行は，これら2人のイギリス人宣教師と，彼等が育て訓練した現地の教師たち—Teacherという語でよばれるが具体的には伝道師と訳すべきか—24人の中から選抜された8人とそれぞれの妻たち，という顔ぶれであるが，それはリフ島出身のテペソ（Tepeso），エリア（Elia），マ

タイカ (Mataika)，グチェン (Gucheng) の4人と，その隣のマレ (Mare) 島出身のケリシアーノ (Kerisiano)，ワウネア (Waunaea)，シモネ (Simone)，ジョセア (Josaia) の4人で，たとえばグチェンはマックファーレンの家のボーイとして5年働いた後に，この伝道師養成の学校でもう5年学んだ者，その妻もマックファーレン夫人の英語学校の生徒だったという。この一行がページェット (Paget) 船長のサプライズ (Surprise) 号という船で，1871年5月30日，リフ島を出帆することになった。

「……そこでパプア湾のダーンリィ島を目指して航行することにしていた。そして1871年7月1日，土曜日の夕方，島のトレチェラス湾に錨を下した」(資料② p. 28～29)「われわれは7月1日，土曜日の昼頃，ダーンリィ島を望見することができた。そして夕刻，これに近づき錨を下した。岸辺には誰もいなかった。後で知ったことだが，原住民たちは島の反対側に住んでおり，そちらの方が彼等の泊地だったのである」(資料① p. 358)

トレチェラス湾は島の北面の湾入であり，当時トーテム・グループごとに4グループに分れて住んでいた島民たちのうち，東北部のマウラム (Mauram)，または西北部のペイドゥ (Peidu) の沖合に碇泊したことになる。トレチェラス湾は現地側の地名ではビカール (Bikar) 湾で，ビカールという集落はペイドゥにあった。

「やがて1人の男が浜辺に現れた。すぐにボートを下して岸に向かった。幸いなことにこの男とはすぐ友達になることができた。……彼は英語が少しできたし，そのほか身ぶり手ぶりを交えて会話ができたのである」(資料① p. 358)。この人物はダバート (Dabat) という名で，島では有力な人物の1人であると同時に，かつてシドニーからここに来ていた白人の漁業経営者の下で働いたことがあった。彼を直ちに船に連れ戻り，そこで細々したお土産を手渡すとともに，誰か島の長老に引合わせるように頼んだのだが，その上でもう一度ボートで彼を岸まで送った。

ところでL.M.S.の「上陸物語」は，多分島民が繰返し繰返し教えられたものだろうが，それは脚色・演出されて一つの劇になっている。実際，1977年の木曜島開島100年の祝典のときに演じられたものを見る機会を得たが，それは白衣を着た2人の白人宣教師，つまりマレーとマックファーレンが黒衣を着た8人のネーティブ・ティーチャーを伴って静静と上陸するのを，物陰に隠れていた裸の島民たちが弓矢や投槍で迎え討つが，先頭の白人2人が天を仰ぎ手を差し伸べて祈ると，たちまち島民たちは武器を棄ててその前に平伏するという，小学校の学芸会のような劇だった。(おまけに，その日は黒衣の教師が7人しかいなかったので，どういうわけか尋ねたら「1人，お祝いの酒を飲みすぎて今日の出演を忘れたんだろう」ということだった。)

実際にはマックファーレン自身の筆によるとそんなものではなかった。「ゆったりした白いガウンを着て聖書を手にした宣教師の姿 (これまで宣教物語の挿絵にあるそんな姿を私も夢想していたのだが) ではなく，ニューギニア伝道の第一歩は軽装で片手にこうもり傘，片手に小さな袋，これも中身は聖書や伝道用の小文書が入っているのではなく，ビーズ玉 (子供へのお土産用)，小さな双眼鏡，マッチをもっていた。天を指して雨をもよばんという風情でなく，岩に腰かけてずぶ濡れの沓下を脱ぎ，濡れたズボンの裾をまくり上げて，白い脛を人目に曝すというみすぼらしい情景だった」(資料② p. 31)

彼等が上陸した地点はケムース (Kemus) というところである。今トレチェラス湾側はまったく無人化しているが，ケムースの丘には宣教100年の1971年に建てられた記念碑がある。『ロンドン宣教協会が1871年7月1日，この地に最初に上陸をして以来，キリスト教をさらに広め，トレス海峡によい政治，福祉，進歩，繁栄をもたらすべく努力をしたすべて

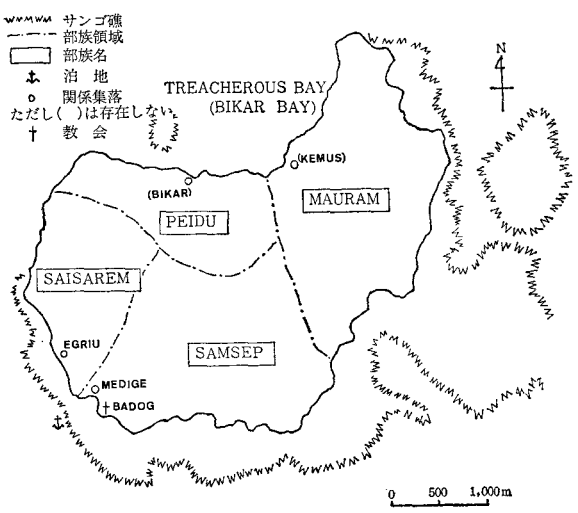

図2 ダーンリィ島概念図（M. Lawrie 原図より作成）

の人の栄誉を讃える。ダーンリィ島民一同，建之，1971年7月1日』

翌朝，サプライズ号は島の南側，つまり住民の多いサムセップ(Samsep)の側に回航，ここで前日の約束どおり，ダバートが島の最高の首領アマニ(A-mani)という人物以下，何人かの首長たちを伴って来て，マックファーレンは事業の幸先よいスタートにつくのであるが，トレス海峡での最初の聖日礼拝は，サプライズ号の船内で，それもリフ語で行っていることは興味深いことである。つまり，それは現地の島民たちへ最初の福音を宣べ伝える礼拝ではなく，これから現地で活動する若い教師たちへの門出を祈る礼拝だったのである。

このダーンリィ島で布教するためにグチェン夫妻が選ばれ，また，機をみて隣のマリー(Murray)島に定着すべく，マタイカ夫妻もとりあえずここに上陸することになり，3日目の7月3日月曜日，荷物を運び上げ，小さい小屋に入ったのだが，8人の教師たちだけでその小屋にいたときにグチェンの妻が「もうリフに帰れないの？」と泣きだしたのに「私たちの罪の救いのために主が十字架の苦しみを味わったことから比べれば，これくらいのことは何でもないよ」と夫のグチェンが励ますのを，戸の外で立ち聞きしたマックファーレンが感激して記している（資料② p.37）。一方，島では「悪い顧問」(evil counsellor)という人物が現れて，せっかくダバートが根まわししておいたのに，島民たちに説いてまわってL. M. S. の一行を拒否するようにと指導して，一夜のうちに形勢が不利になったが，この人物がロトゥマ(Rotumah)出身の漁業者で4人の妻をもっていたという記述もおもしろい。彼は直接教師たちをもこわがらせようとして，マリー島の指導者が外来者に対していかに狂暴にこれを迫害するか，またダーンリィ島，マリー島にはワニ，ヘビ，トカゲ等，有毒，有害の動物がうようよしていてどれだけ多くの人がそれで死んだかということを告げた。この話に対して，教師のひとりテペソはこう答えている。「なるほど。あなたのいうことは事実かもしれません。しかしそこにも人々が住んでいるのでしょう。救いを必要としている人がいる以上は，私どももそこに留まります。」（資料③ p. 46）

こうして，ダーンリィ島は最初の宣教基地としてそこに2組の教師夫妻が留まることになったが，ここは同時に，「……次の（ニューギニア）本土への伝道を進めていくために，（この島は）サナトリアム，休養の場，教育センター，その他を建設するために最もふさわしい場所である」（資料② p. 37）として本土の側は，低湿で不健康地で水も悪いし，沿岸には泊地もないから，ダーンリィ島のこの宣教基地が将来にわたって最重要拠点になるであろうとマックファーレンは予察している。のちに（1876年頃）パプア研修所（Papuan Institute）をここに建設し，かつてリフ島で成功したような英語教育，技術指導，そして新しい教師の養成を試みることになる（資料② p. 81～92）のも，このときの予見に基づいている。

なお，ダーンリィ島での以後の活動は，上陸地点

のトレチェラス湾の側ではなく，住民の多いサムセップ，サイサレム（Saisarem）の側で展開され，現在の教会堂も1912年，バドグ（Badog）に建設されている。おもしろいことにケムースの浜辺でマックファーレンと対面した最初の島民ダバートも，サムセップのメディギ（Medige）村の人で，当日なんらかの理由で山を越えて北海岸に行ったものらしい。彼の碑はメディギにあり『愛するダバドの記念碑。1871年，自らの部族の法を否定し，救いの善き訪れを受け入れた人』と記されている。文中でダバートとしたものが地元の碑文ではダバドという綴りで書かれている。

II　海峡内の島々への伝道

サプライズ号の以後の航海の足どりと，リフ島から伴ってきた伝道師たちの最初の配置を資料 ③ p. 46～49から抄録しよう。

7月3日，グチェン夫妻，マタイカ夫妻をダーンリィ島に配置（マタイカはマリー島に伝道するため）。

7月5日，トゥドゥ（Tudu）島着，テペソ夫妻，エリア夫妻を配置。ここがニューギニアとの交易の衝点であると解釈し，本土側への伝道の機を伺うことにする。

7月6日，ダウアン（Dauan）島着。

7月7日，サイバイ（Saibai）島着，ジョセア夫妻，シモネ夫妻をサイバイ，ダウアン伝道のために配置，ケリシアーノ夫妻，ワウネア夫妻もニューギニア本土伝道のためここで待機することになる。

（7月8日または9日）トゥドゥ島に戻る。

7月10日，スリー・シスターズ（Three Sisters）諸島沖に仮泊。

7月11日，サマーセット着。司令官のチェスター（Chester）中尉（のちに木曜島開島のときの初代長官となる）がマリー島のことに詳しく，次にダーンリィ島に行く機会には，そこからマタイカをマリー島へ伴うことを約束した。

7月15日，レンネル（Rennel）島着，ここでサイバイ島に残したジョセア，シモネの連絡を受けることになっていたが，彼等はダウアン島の首領ヌダイ（Nudai）の心変わりで急遽そこを引上げて，トゥドゥ島に来てテペソ，エリアと一緒になっていた。船はトゥー・ブラザース（Two Brothers）島沖に仮泊。

（7月16日ごろ）船はトゥドゥ島に廻し，マックファーレンはヨーロッパ人の帆船でサイバイ島に赴く。そこからダウアン島に行き首領ヌダイともう一度友好関係を再確認して，トゥドゥ島へ帰着。

7月19日，トゥドゥ島を出てダーンリィ島着，グチェン等の様子をみる。

7月23日，ダーンリィ島の聖日礼拝に30人程のロヤルティ諸島出身者が出席。彼等は漁業に従事する労働者としてすでに数年間，ダーンリィ島に滞在しているものである。

7月24日，ダーンリィ島を出てリフ島への帰路に着く。途中，ニューギニア南岸のユール（Yule）島泊。

この資料③およびその原資料ともなるべき資料①，②ではトゥドゥ島はウォリア（Warrior）島という英語名で書かれているし，マックファーレン自身の航海日誌であ

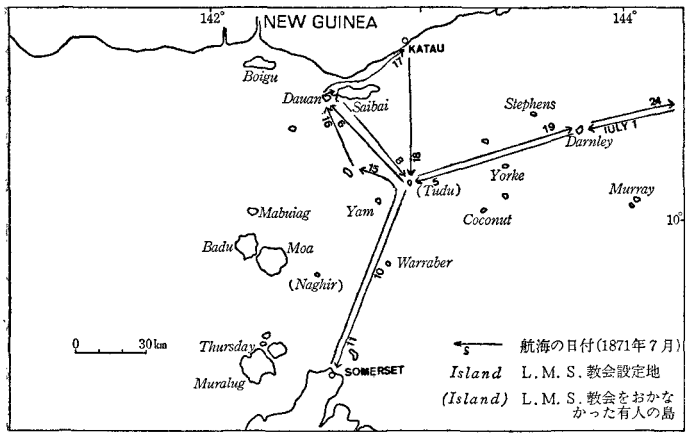

図3　L.M.S.「光の来た日」の航海

る資料①では，ダウアン島を耳で聞いた発音でタウアン(Tauan) 島と書いている。(これは同人の資料②ではダウアン島と改められている) ところで行動記録のこの部分を，マックファーレンに依らずベイトンのものから抄録したのは，この方がはっきり船の行動と人の動静を記述しているからで，その点，マックファーレンのものではこれからの計画との関連で，前途への思いめぐらしや配置する教師たちの身辺への憂いを含んだ配慮が詳しく書かれてはいるが，7月1日～3日の行動は逐時的に感動をこめて詳細に記録しているのに，5日以降では日付がなかったり，精粗の差が大きかったりして，はっきり日程を追い得ないからである。ベイトンも日付を追証することができなかった部分は空欄であり，前後の関係から筆者が（7月8日または9日)，(7月16日ごろ) と補注した。

その上で後述するが，7月16日頃にダウアン島を再訪してから19日にトゥドゥ島を出発するまでの間に，資料①ではニューギニア本土のカタウ(Katau) という村に立ち寄ったことが記されているのに，資料③ではそれにふれていない。先にも述べたとおり，L.M.S. が最初からニューギニア本土を最終目的地としていたのに対し，英国国教会はクインズランド州域内のトレス海峡諸島民を対象として「オーストラリア原住民伝道」そのものを目標としていたので，L.M.S. 自体の意図にこだわらなかったからであろう。

さて，教派による目的意識の相違は伝道師の配置計画で顕著に現れる。トレス海峡全域を対象とするのなら，いわゆる西部諸島つまりバドゥ (Badu)，モア (Moa)，マビオグ (Mabuiag) の各島はおろか，中部諸島，つまりヨーク(Yorke)，ココナツ(Coconut)，ワラビール(Warraber)，ヤム(Yam) の各島も無視されているのが納得できないのだが，L.M.S. は専らニューギニアとのかかわりのある島だけを選んで事を進めていたので，トゥドゥ島はニューギニア側のパラマ(Parama) 島との交流が多いから，ダウアン，サイバイ両島は正に位置的にニューギニア本土に正対しているからという理由で宣教基地 (Missionary Station)を置くことにしたものである。とはいうものの，L.M.S. は海峡全域の伝道を副次的には考えていた。翌1872年，ワイヤット・ギル (Wyatt Gill) 牧師が第2次の派遣教師をラロトンガ (Rarotonga) 島，サモア (Samoa) 島等から伴ってきたので，既存のダーンリィ，マリー，サイバイ，ダウアンに続いて，ボイグ (Boigu)，ヤム，ヨーク，マビオグ，バドゥの各島にこれを配置したのである。

ところでマックファーレンの一行がトゥドゥ島（ウォリア島）を2番目の寄航地として選んだのは，そこで真珠貝漁業を操業して地元民を多数雇用し，地元民にも信望があったバナー (Banner) 船長という人物の協力が期待できたからである。「われわれのウォリア島(トゥドゥ島のこと)訪問は結果的に最大の意義深いものとなった。この島は今後のニューギニア伝道の歴史にとって，最も重要な場所となるであろう。われわれはそこで採貝操業をしているバナー船長という人物に会ったが，彼は親切にわれわれを受入れ，今後の航海にもたいへん有益な援助をしてくれた。また，われわれの事業をするのに適していると思われる島々の情報も与えてくれた」（資料① p. 361)

バナーはマックファーレンに1人の優秀な助手を提供している。トンガ (Tonga) のヌクアロファ (Nukualofa)出身のジョン・ジョセフ(John Joseph) で，30年も前に郷里を出ているが，郷里でキリスト教にふれていたので，クリスチャンとして白人にも現地人にも信頼されていたという人物で，トレス海峡ではアイブ (Ive) という愛称でよばれていた。イギリス海軍の戦艦に乗組んでクリミヤ戦争にも従軍したのだが，シドニーでバナー船長に会い，労働者の監督として雇われ，同時に私設連絡将校ともいうべき役柄を帯びてこの島に来ていた。英語，ミリア

ム語(海峡東部の言語)，サイバイ語にも長じ，サマーセットの司令官チェスター中尉から各島の首長たちに至るまで，皆彼の友人であったという。彼は以後マックファーレン一行のダウアン，サイバイ行を案内するのだが，とくにダウアンの首領ヌダイとは数年前に「名前交換」の儀式まで交した仲であった。マックファーレンは以後，彼をジョー(Joe)とよんで重宝がっている。

もう一つバナー船長は，彼等が未測量のニューギニア本土近くへ行くのに大きなサプライズ号で航行するよりも，大型ボートで行く方がよいとすすめ，それを貸してくれさえした。

このようなバナー船長の好意に，一行は全面的に依存したようだが，気がつくことは，この島に関しては現地の島民に関する記載がほとんどないことである。それまでトゥドゥ島は，「首狩りのケビス(Kebisu)」という首領が通行の船舶を襲って海賊行為をしたことで恐れられたところである。ダーンリィ島のトレチェラス湾の事件をあれだけ詳しく知っていたマックファーレンが，これまで何隻かの船が襲われたトゥドゥ島のケビスを知らない筈はない。すでにバナー船長が旧来の島民を完全に制圧していたとしても，この島の選択は，それこそ島民そのものを対象にしたものではなく，宣教事業の戦略的拠点として考えたことは明らかである。マックファーレンの予想に反して，この島が後のニューギニア伝道にはほとんど重要性をもたなくなったのは，正に頼りにしたバナー個人が島を引揚げたからであって，一方ケビスの一族郎党以下，全島民がヤム島に移住したので，当然のことながらここには教会を建てる必要性もなくなった。

次のダウアン島には南海から来たパネタ(Paneta)という男の伝承が残っている。この「パネタ物語」の最後の部分に，L.M.S.の上陸の話がある。「1871年7月6日，ロンドン宣教協会の一行がやって来た。船はダウアン沖に錨を下し，宣教師たちは船の上で祈ったあと，小さいボートで岸に向かった。(首長の)ジャワイ(Jawai)は海岸で出迎えたあと，彼等を歓迎して家に案内した。宣教師たちはジャワイにタバコを与えたが，ジャワイはこれを弟や子供たちにも分けましょうと受取った。ジャワイは宣教師たちにこのまま家に滞在するようにといった。1人の宣教師がジャワイの手を取ったので祈るのかと思ったが，皆は祈る代りに讃美歌を歌い出した。"日の照る限りを主イエスは統べ給う"この歌声がすばらしいので，ジャワイと彼のまわりの人々はそのメロディーに聴き入った」(ワイアカ・ジャワイ〔Waiaka Jawai〕神父所蔵文書より)

このジャワイという首長と，先のジョン・ジョセフの「名前交換」をした相手のヌダイという首長は別人で，ジャワイの妹がヌダイの妻であり，ダウアンの首長はジャワイ，隣のサイバイ島の首長がヌダイ(ダウアン島の伝承や，サイバイ島の碑文ではネルダイ(Nerdai)となっていることもある)であるのだが，「パネタ物語」の中に出てくる讃美歌は，マックファーレンの資料①p.364とも完全に合致していて興味深い。とくに，この讃美歌が明らかにイギリス人の作詩・作曲による歌であるのに，現在はこのような西洋風の讃美歌は歌われず，島民たちのいわゆるアイランダー・ヒム(Islander Hymn)だけになっていることは注目すべきことである。またダウアン島の伝承では，このL.M.S.の上陸の際に，ジャワイの弟のガメイ(Gamei)という男がこれを海岸で殺そうとしたのを，兄のジャワイが制止したという話もある。「上陸記念碑」はワルジッド(Warzid)の小川沿い，教会の前面に船型の囲いの中に建てられている。

さて，案内者のジョーは「名前交換」の相手のヌダイが，一時的にサイバイ島に出かけて不在だと解したが，上陸時のガメイの敵意も重なって，一行は翌朝早々にサイバイ島に行っている。もちろん，この両島は近接しているので航海には1時間も要しな

い。

サイバイ島の「上陸記念碑」は，現在の集落の中心部に当たる北岸にあるが，『L. M. S. 宣教師団の上陸地点。この銘版はダウアンのマムース(Mamoose, 首領のこと)，ガラマイ（Garamai）とジャワイが宣教師たちをダウアンからサイバイに案内して来て，サイバイのマムース，ナダイ(Nadai)に紹介したことを記念したものである』とあって，ヌダイをダウアンの首長と考えていたジョーの解釈が思い違いであることが証明されいてる。

サイバイ島に関しては一行の行動の詳細を再現することはしないが，対岸，目近にニューギニア本土を見たマックファーレンの感慨は測り知れないものがある。「……しかし辛いことだが，われわれの目的を達成し，進展させるまでに，どんな苦しみと戦いと障害とが横たわっているのだろうか。しかし確かな結果を信じよう。主はその答を語っておられる」(資料① p. 370)

先にも述べたように，マックファーレンはダウアン島を再訪したのち，7月17日月曜日，午前2時にダウアン島を出発して，ニューギニア本土のカタウに立ち寄っている。ジョーがかつて訪れたことのあるこの村で，村人たちにケリシアーノ夫妻，ワウネア夫妻を紹介するためだが，その上で彼等をサイバイ島に戻らせて，言葉の習得その他の準備期間を与えている。(資料① p. 374～376)

ここで次に趣を変えて史実を歪めた伝承の例ともいうべきものを記しておこう。それはヨーク島の「上陸記念碑」である。ヨーク島の中部北岸，アプサグ（Apsag）というところにあり，船型に築いた碑に『最初の L. M. S. 宣教師が，この地に1871年7月3日に上陸した記念として』と刻まれている。しかし，マックファーレンの記録でもその他の資料でも，1871年の一行の行程の中では，誰一人この島を訪れた筈はない。しいていえば，ダーンリィ島上陸が7月1日，トゥドゥ島に着いたのが7月5日だから，その中間のヨーク島で7月3日という日付を作り上げたということであって，その7月3日は，マックファーレンの記録ではダーンリィ島で行動したことが詳しく述べてある。アプサグの地が在来信仰の聖地ゾゴ(Zogo)であり，ここに足を踏み入れると即座に足が腐るといわれていたところであるから，それを逆手にとって，L. M. S. がここに足を踏み入れ，誰も足が腐ることもなく以後の宣教活動を続けたという証しにしたものと思われる。またヨーク島の南側，現在の教会の広場の一隅には『まず L. M. S. の牧師たちが福音を宣べ伝えたことによって，光が来り，闇が去った。これらの働きはマタイカ，スウィニー（Swiney），テパサ（Tepasa），ウォニウォニ（Woniwoni），パレサ（Paresa），トンモ（Tommo），ジョサイア（Josiah），それとマレー博士，マックファーレン博士によるものである。神と人との愛によって年を経ても人々の血の中に語り継がれる』という碑文があって，2人の白人宣教師と，マタイカ，シモネ(スウィニー)，テペソ(テパサ)，ジョセア(ジョサイア)，ワウネア(ウォニウォニ)の5人までは判断されるが，あとの2人の名前は「光の来た日」のメンバーと符合しない。そしてマタイカはマリー島に，テペソはトゥドゥ島に，シモネとジョセアはサイバイ，ダウアン島に配され，ワウネアはカタウへの要員とされた人物であるので，これも史実と合致し難い。むしろ，この島で教会の地に井戸を掘った人物として名の残るサミュエラ（Samuela）というサモア出身の教師が，1872年の第2陣で来島したのが最初であると思われるが，アメリカ人船員エドワード・モズビー(Edward Mosby)の家系が繁栄したヨーク島で，「光の来た日」に取残されていることに引け目を感じ，新しく「史実」を作り上げようとしたものではないかと思われる。

Ⅲ　結語

宣教という事業はいわば一種の戦略を伴った作戦

行動である。トレス海峡のような，そこに統合された地縁社会が構成されていないままに，数多くの島嶼社会が分立しているところでは，どの島とどの島に重点を置くことが効果的であるかという判断は容易ではない。L.M.S.が入る前に，この海域でやや強大な勢力を誇っていた島，たとえばトゥドゥ島やアウリード（Aureed）島が，そのまま地域への伝道の拠点として最適であるとは限らないし，後にイギリス乃至オーストラリアが植民行政を及ぼすための政治的中心地としたところ，たとえば木曜(Thursday)島やダルー(Daru)島が現地の住民への宗教的影響を波及させる出発点になるとも限らない。いわば地政学的配慮ともいうべきものによって選択がされたという点で，1871年段階でのダーンリィ島，トゥドゥ島の価値づけがなされたということを，地図の上で再検討しておこうと思った次第である。

なお，その後英国国教会が伝道の任を荷うようになった1910年代を境に，島民を特定の島に集め，また，各島の中でもトーテム・グループごとに「住み分け」をしていたものを，教会を中心とした集落へと再編成した経緯は，正に文化変容の中におけるキリスト教の影響として論ぜられるものであるし，筆者らの現地調査報告の中に詳述したものであるが，そこでは歴史地理学的分析というよりは，民族学的分析が重視されるべきである。

おわりに

トレス海峡内に，その家系の祖がリフ島から来たというものが幾つかある。それらは，「初めてL.M.S.がトレス海峡に来た時に，それに随行して来た家系である」と自称している。筆者はその名簿を携えて，1981年にリフ島の現地調査をしたが，めぼしい成果は得られなかった。むしろ，船員として漁夫として，強制的にニューギニア方面へ連行されたという伝承の方が真相である場合が多い。他方，明らかにリフ島からマックファーレンが同伴したグチェン，マタイカ，テペソ，エリアの方は，その縁者とか関係者の子孫を探り知ることができたものもあるが，なにしろ4組の夫婦は故郷に帰って来なかったので，これも確実に後を押えることは困難であった。隣のマレ島からの教師を合わせると8組もの夫婦がトレス海峡に赴いておりながら，どういうわけかその子孫というのが1人も残っていないという状況で，僅か100年前の宣教史が，早くもその真実をつきとめ難くしていることを改めて知るばかりであった。

この報告は，1975，77，79年の文部省海外科学研究費による調査報告の一部であるが，現在編纂中の同調査の公式報告書には収録していない。また現地調査のうち，ダーンリィ島に関する部分は，われわれの共同調査者で同島を担当した瀬川真平氏（関西学院大学研究員）の示唆によるところが多い。またエジンバラ大学神学部の書庫閲覧に関して，緒方純雄教授（同志社大学神学部）の御配慮を賜わった。ここに付記して謝意を表する次第である。